

## 10 甲状腺眼症に対する球後照射・ステロイド併用療法

大嶋 康義・羽入 修・宮腰 将史  
 上村 宗・金子奈々子・平山 哲  
 鈴木 克典・相澤 義房  
 新潟大学大学院医歯学総合研究科  
 内分泌代謝分野

【背景】甲状腺眼症は、重篤な例では、視力低下や複視などにより QOL が低下するため、積極的な治療が必要となる。急性期においては、ステロイド療法や球後照射などの内科的治療が選択されるが、現状では、コンセンサスの得られたプロトコルがない。当科においては 1992 年より球後照射・ステロイド併用療法を施行しており、今回成績を報告する。

〔症例 1〕50 歳女性。甲状腺眼症に対し、10 日間で 20Gy の球後照射とステロイド併用療法を施行した結果、数日後より、眼球突出感、複視、結膜の充血、浮腫等が軽快するなど短期効果が確認された。

〔症例 2〕46 歳男性。同併用療法を施行 1 年後に、眼球突出感、複視、左下直筋、左内直筋の肥大が軽快し、長期効果が確認された。

【当科の治療成績】10 年で 38 例あり、近年他施設からの紹介により増加傾向がある。20 代と 50 代でピークを持つ二峰性の分布を示し、やや女性に多い。眼窩 MRI では 50 %、複視や結膜充血・浮腫等の自覚症状は 84 % に有効であった。有効例の特徴は、発症早期、外眼筋肥厚型、非喫煙者であった。今後はこれらの特徴を有する症例に選択的に治療を行い、喫煙者に対しては、積極的な禁煙指導を行っていく方針である。またステロイド単独療法など他のプロトコルとの比較検討や 5 年、10 年後の長期予後の検討も行っていく予定である。

## II. 特別講演

### 「甲状腺と不整脈」

東海大学医学部

生体構造機能系生理科学教授

中澤博江

---

### 第 58 回新潟麻醉懇話会 第 37 回新潟ショックと蘇生・ 集中治療研究会

日時 平成 15 年 12 月 13 日 (土)  
 午前 10 時～

会場 新潟大学医学部第 2 講義室

## I 一般演題

### I 非開胸食道切除術中気管穿孔をきたした症例

古谷 健太・飛田 俊幸・渋江智栄子

新潟大学医歯学総合病院麻酔科

72 歳男性、食道癌にて非開胸食道切除術を予定された。麻酔は GOS に硬膜外を併用、A-line と末梢 V-line 二本、CV を確保して麻酔を行った。用手的に食道を剥離した午後 1 時ころ機械換気が不良になり、用手換気を行ったところ頸部の切開創より空気のリーク音が聞こえた。気管ファイバー下に観察を行い気管分岐部手前 2 cm の膜様部に発赤を確認、気管穿孔と判断した。損傷部位が小さかったため、気管チューブを分岐部直前まで押し込み、カフで損傷部位をふさぐことで機械換気可能とし、手術を終えることができた。術中気管損傷は手術および麻酔によって起こる。特に非開胸食道切除術では、術野から縦隔内が見えにくく、麻酔医が何らかの異常を感じた際には術者にきちんと伝えるべきである。損傷部位に応じたチ